

桜蔭俳話会九月句会(第三〇八回) 桜蔭会館

平成二十四年九月二十三日(日)

3点 叛く子と対峙の母や夜の百足

幸

癒やされしコンサート終ふ星月夜

友子

2点②巡回の猫の気配やみだれ萩

秀一

美しき闇を蔵して芒山

守

2点①玉入れの玉また逸るる野菊晴

貞勝

ブータンの松茸届きほの香り

幸

結末を先に読む癖秋灯

友子

(不在投句 野上貞勝、古野明美)

守

クロワッサンの皮の剥落昼の月

友子

捨て舟に鳥の休める残暑かな

ツル子

針の目の見えて見えぬや秋の夜

明美

幻想のひとつに平和鬼胡桃

貞勝

1点①鬼やんま泰然として風向い

幸

①灯火親し間口の狭き本積みて

秀一

踊下駄靴屋に並べ海の町

貞勝

秋園や名札つく草つかぬ草

秀一

道標の十字架めきし草紅葉

守

やはらかき紙に包みし葡萄受く

貞勝

領海の封鎖のかたし野分立つ

明美

店先の三陸さんま光をり

友子

原発の廃棄宣言秋の虹

守

携帯のカメラずらりと秋の虹

友子

日中の友好釣瓶落としかな

明美

大鐘の余韻の中を桐一葉

守

切り絵めく踊りながるる風の盆

貞勝

秋彼岸孫の背丈を告げてをり

ツル子

紫外線とほすプリズム秋めきぬ

明美

敬老会三味線の撥小学生

秀一

※赤とんぼ一駅乗りてバス下りる

幸

花芒ロープウェイのすれすれに

ツル子

野花摘むやうやく秋となりにけり

明美

木漏日の礎にひと待つ秋彼岸

秀一

花むくげ明日に咲けよと今を咲く

ツル子

寝ころんでメールばかりの秋暑かな

秀一

ほおずきの解す手先の確かなり

ツル子

寿と軸に書かれて敬老会

幸